

## 学校儀礼の社会化機能に関する研究：F高体育祭における教育人類学的視角

藤本, 千春  
福岡教育大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2320993>

---

出版情報：九州人類学会報. 14, pp.91-104, 1986-06-25. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：



# 学校儀礼の社会化機能に関する研究

## — F 高体育祭における教育人類学的視角 —

藤 本 千 春

### 目 次

- I 問題の所在 — 概要
- II 概念規程 — 社会化と儀礼
- III 体育祭の実態
  - 1. F 高の歴史
  - 2. 体育祭 — 学校行事に占める位置
  - 3. 体育祭の構造と過程
  - 4. 体育祭当日の概要
- IV 体育祭の意義と役割
  - 1. Youth Culture としての体育祭
  - 2. 道徳的社会化機能
  - 3. 社会的機能
  - 4. 逸脱者の役割
- V 体育祭の社会化機能
- VI 結 び
- 注

### I 問題の所在 — 概要

近代産業社会の学校の機能は知識伝達だけにとどまらず、所与の社会集団のもつ価値・規範を獲得し、成員に相応しい役割遂行能力の基礎を培う、いわゆる「社会化」(socialization)も学校が担う基本的機能の一つである。学校は社会的にみれば、一つの社会集団である。その集団の一員として、子どもたちはどのように参加し、その集団のもつ価値や規範を身につけていくのであろうか。また、それらの価値・規範は、学校の存立基盤をなす社会の価値・規範とどのように関わりあっているのであろうか。こうした学校の社会化機能に関する研究は重要な課題として、これまでも注目されてきたところである。しかし、学校の内部から丹念な観察を行った研究は数少ない。特に、青年期における社会化は、職業の選択や社会人となるべき精神的基盤により直接的に結びつくという、重要な役割を担っていると考える。そこで私は、この青年期を対象とした学校の社会化機能について、研究を行うこととした。その際、教育人類学の分野では比較的新しい視角として、「儀礼論」の導入を試みた。儀礼は、人類社会に普遍的な現象であり、その社会(集団)の価値や規範を独特の情緒的雰囲気なかで、集中的に伝達する場ないし社会過程として、人類学では古くから注目され、研究されてきた。そこで本研究では、こうした儀礼論の視角を導

入ることにより、学校行事全体を儀礼体系としてとらえ、学校における「社会化」機能を新しい角度で捉え直そうとした。

こうした角度からの先行研究として、比較的教育人類学と近い立場にある教育社会学の分野では、田中一平らによる一連の研究がある<sup>1)</sup>。この研究は、学校組織論の立場から、R. King<sup>2)</sup>やB. Bernstein<sup>3)</sup>に依拠しつつ、学校のもつ象徴的儀礼的側面にも注目し、その微視的把握を試みた野心的なものである。ここでは儀礼は、学校の組織構造を支える3つの要素の一つとして数えられている。他の2つは、「expressive order」、「instrumental order」である。学校儀礼は、expressive orderとinstrumental orderが互いに機能しあう学校の組織構造においてその課題達成の任務を負う成員の内的心情を支え、かつ、積極的に動かしていくものとして捕えられている。しかし、惜しむべきは、象徴・儀礼に関する概念があいまいであったため、折角の意図もいまひとつ十分に生かされなかったという印象が残る。

一方、学校儀礼に関する教育人類学的研究の先例としては、アメリカのハイスクールに関するJ. Burnett<sup>4)</sup>の研究がある。この研究は、「強化儀礼」(rites of intensification)と通過儀礼(rites of passage)の2つの概念を基軸にして、入学から卒業までの間に生徒が経験する諸儀礼とその意義を分析したものである。この強化儀礼と通過儀礼の定義は曖昧なものの、一つの目安として捉えることは可能であろう。本研究では、この研究を参考にしつつも、さらに、一つの儀礼を当日に致るまでのプロセスより追っていくことによって、その儀礼の果たす役割をより鮮明にしようとした。

学校儀礼にも様々なものがあるが、本研究では特に、ある高等学校における体育祭に焦点を絞った。その理由は主として、この学校の体育祭が、実質的に生徒集団のイニシヤチブを基軸として組み立てられており、また、強化儀礼としてだけでなく、卒業に向けての一種の通過儀礼的な性格を持つ、大きな行事となっているように思われるからである。私が調査を行ったF高校は、県下でも有数の進学校であり、伝統をもっている。旧制中学時代から行われている体育祭は、この学校の行事の中心であり、生徒全員が参加できる行事である。6月から9月中旬に行われる体育祭当日まで、その計画、準備、必要な用具に致るまで、全てほとんど、生徒自身の手によって為されるのである。

本研究では、この体育祭に生徒達がどのようにコミットしてゆくのかを調べることによって、彼らの社会化がどのようなプロセスを経てなされるのかを述べようとするものである。

具体的な調査の方法としては、昨年(2007)の9月から11月にかけて観察、インタビュー、資料の収集を行った。観察は、体育祭当日に行った。また、参与観察ができない部分については、学校長・教師(2名)・生徒(3名)・卒業生(2名)に対するインタビュー及び、学校に残されている体育祭の実行ノートやその他の資料で補うよう努めた。

## II 概念規定 — 社会化と儀礼

ここで、本研究のキーコンセプトである「社会科」・「文化化」および「儀礼」(ritual)の概念的特質について述べておきたい。これらの概念についてだけでも十分に論議の余地があるが、本論に必要な限りについて述べておきたい。

教育人類学と比較的近い学問として、教育社会学がある。日本では、教育人類学は教育社会学の下位学問と見られているむきがある。だが、歴史的に見ても教育人類学は文化人類学から派生した学問分野で、その依拠する理論、方法等、他の学問分野とは異なった特徴的なものをもっている。とはいうものの、研

究対象等、学問的に教育社会学とは相通じる面が多くあるので、ひとまず教育社会学の「社会化」の定義について述べておこうと思う。

教育社会学における、「社会化」の定義は、大きく次の三つに分れるようである。

まず、一つめは山村による教育と社会化の区別による定義である。山村は、「社会化のもつ体系維持性、平均的類型性、同調的適応性に対し、(教育は)革新性、個性的独自性、主体的創造性、理念的判断性といったものを志向する。」<sup>5)</sup>と述べる。この定義は、「社会化」、「教育」特徴について、述べたものである。ここでは、教育と社会化は、対立概念としてとらえられている。<sup>6)</sup>

二つめは、萩原、池田らの定義である。萩原は、社会化を、「個人が、所属する一定の社会または集団のなかで行動できるように、その社会または、集団の主要な価値、シンボルや、感情を学習し、内面化してゆくすべての過程」<sup>8)</sup>としたうえで、「社会化が、子供の基本的習慣の学習、読み方、書き方の学習、仲間同士で方言を話すことを覚えたり、母親としての行動様式の学習など、いわば子どもの自然な生活過程としての学習であるのに対し、教育は人間の価値的形成などといわれるように意図的かつ理念的な機能とすることができる。」<sup>9)</sup>という。この、生活行動様式の学習を、池田は、<sup>10)</sup>「文化化」といい、それを含む、人間が社会の成員として生きるために必要な全ての学習過程を「社会化」としている。つまり、社会化は文化化の上位概念であるととらえられている。

最後は、松原によるものである。<sup>11)</sup>松原は、人間の発達過程を「『社会化』(socialization) — 『文化化』(enculturation) — 『人格化(個性化)』(personalization)」<sup>12)</sup>ととらえ、自立の高まりで分類しようとした。しかし、こうした分類は理念的であり、その人間がどの過程に当るのかは明確には分らない。本研究における社会化のとらえ方は、2番目の教育の概念に近いが、文化人類学のとらえかたとはやはり、異なっている。

文化人類学では、一般に社会化(socialization)は文化化(enculturation)の下位概念と考えられている。しかし、定義は一律化しているわけではない。文化化と社会化について、<sup>13)</sup>江淵は次の三つに分れると言っている。

1) 文化化を広く、生涯継続する過程ととらえ、そのうち、育児と基本的な生理的、社会的習慣形成のためのしつけが行われる、初期段階の文化化をとくに<社会化>と呼ぶ用法(Bock 1974)<sup>14)</sup>。

2) <文化化>は、個人が所与の社会に固有の行動様式を習得する文化的条件づけの過程全般をさすものと解し、一方<社会化>は、個人をその社会の役割体系のなかに統合させる「役割取得」の過程と考える用法。

3) マーガレット・ミード(M. Mead)の所説(中略)。彼女は、<社会化>を「〔人間社会すべてに〕普遍的な過程としての学習にかんする抽象的叙述」を意味する用語として規定し、他方<文化化>を「具体的な個別文化において生紀する学習の実態の通過」をさす概念として用いることを提案している。(M. Mead 1963)

これらの中で、2が初めて「文化化」の定義を行ったハースコビッツ(M. J. Herakovits)の系統をくむものである。ハースコビッツの文化化の定義は、「幼年期およびその後の生涯において、ヒトが自分の所属する文化を活用する能力を獲得する手段としてのさまざまな種類の学習体験」<sup>15)</sup>であり、江淵は、「『行動様式(文化)』の習得を<文化化>と呼び、『地位・役割(社会)』の獲得を<社会化>と呼んで区別した。」<sup>16)</sup>と述べている。

文化化、教育の違いについては、江淵はウォーレス（A.F.C. Wallace）をあげ、次のようにいう。ウォーレスは、「学習（education）—文化化（encultulation）—教育（aducation）—学校教育（school education）」という四つの概念の連続体でとらえている<sup>17)</sup>と。そして、文化化が「定型的・非定型的とを問わず、あらゆる形態の文化伝達を含む概念」であるのに対し、教育は「その中の定型的部分」にあたると、江淵は述べるのである<sup>18)</sup>。後者をさらに、「教育」と「学校教育」に分けて江淵は次のようにいう。

「教育は、個人の属する社会が必要とする技能・知識・理解・思考方法・態度・品行などを入念にかつ系統的に伝達しようとする営みである。そのような営みがそこで学んだことが適用される実生活とははっきりと区別される特殊な環境および役割をもって行われるように制度化されたものが学校教育である。」<sup>19)</sup>

本研究では、こうした学校教育における社会化は、ハースコヴィッツの言うような地位・役割の取得として限定的にとらえるよりも、役割取得や道徳的陶冶、価値の注入・伝達など、包括的にとらえたい。そこで、こうした概念の区分を学校の機能という側面からとらえたものに、レイマー（E. Reimer）のものがある。レイマーは、学校の機能を次の四つに分けている<sup>20)</sup>。1) 保育（Custodial care）的機能、2) 社会的役割選択（Selection for social role and social status）機能、3) 価値形成（Value formation）機能、4) 教育（Cognitive education—知識・技能の伝達による知性の啓蒙<sup>21)</sup>）機能。さらに、江淵は、上記の4に見るような学校の顕在的機能に対し、その潜在的機能とは、1から3にあたり、これを学校の社会化機能と言っている<sup>22)</sup>。本論では、この社会化の定義に基づき論を進めることとしたい。

そこで実際の調査を行う上では、この「機能」について述べておかなばなるまい。

マートンは、「機能」について、次のように述べている。

「機能」とは、一定の体系の適応ないし調整を促す観察結果である。<sup>23)</sup>

「顕在的機能とは、一定の体系の調整ないし適応に貢献する客観結果であって、しかもこの体系の参与者によって意図される認知されたものである。これと相関して、潜在的機能とは、意図されず、認知されないものである。」<sup>24)</sup>

ここで述べておきたいのは、社会化は意図的に為されたことがらがそのまま完全に内面化するわけではなく、こどもに学習され、獲得されていくものであるということである。また、個人差がある部分と、文化によって定型的な部分とがあり、本研究においては、後者の場合について、述べるものである。

一方、文化人類学では古くから集団の価値・規範・知識を伝達する文化化の制度ないし慣行として、「儀礼」（ritual）の研究がなされてきた。その「儀礼」そのものについて、何を儀礼と見なすのか、その判断について青木は次のように述べている。「儀礼は行動として一定の脈絡の中で形成されたプロセスを有する<sup>25)</sup>」。つまり、日常生活の中での儀礼的行動が儀礼であるのか否かということは、行動のプロセスの結果において判断されるものであると述べているのである。そしてその上で、「儀礼と目される形式的な行動のプロセスがその結果として示す特徴」として、青木はムーアとマイヤーホフ（Moore, S. F and Myerhoff, B<sup>26)</sup>）を紹介している。それは、次のようなものである。

1. 明確な目的がある
2. 明確なシンボルとメッセージがある
3. 潜在的な主張がある

#### 4. 社会相互関係への影響がある

#### 5. 文化対カオス

これらの特徴について簡単な説明を加えると、次のようなものであろう。儀礼には顕示的な目的があり、それが合理的であるなしにかかわらず、その儀礼に参加する人々によって確認されている。儀礼は、その社会の価値観がシンボリックに現われ、強調される場である。そして、人間の情動に訴える仕方で、知識や規範を教えこむのである。しかしそれだけでなく、潜在的な、例えば主催者に意図されなかった社会の矛盾や葛藤、価値などが現われたりするのである。また儀礼は、始めはバラバラだった個人が、こうした儀礼に参加することを通じて一つにまとまるという機能をもっている。これによって、人間関係は、社会の危機を乗り越えることができる。儀礼は、人や社会を秩序あるものにするのである。

以上のような特徴は、儀礼の領域が拡散していかないための指標であり、かつまたこの指標の設置は、日常生活レベルにまで広がってきている儀礼研究の有効性を高めることとなると考える。私は、本研究において儀礼をプロセスとしてとらえながら、これらの特徴を体育祭において確認することで、儀礼としての体育祭の意義を述べようと思う。

そこで、現在の儀礼研究において述べられている儀礼の機能について記しておきたい。

大林<sup>28)</sup>は、「個人と個人との間の相互関係が攪乱され、社会の均衡が失われる。この失われた社会の均衡を回復するのが儀礼の重要な機能である。」と述べている。つまり儀礼には、均衡保持の機能があり、カオスからコスモスへと秩序づけられる。また、共通の儀礼に参加することで、情緒的な連帯感が生れ、社会関係が維持されていくという機能<sup>29)</sup>もある。これらの機能が、実際の体育祭においてはどのように現われ、社会化と結び付くとさらにどのような特徴をもって現われるのか述べることにする。

### III 体育祭の実態

#### 1. F高の歴史

F高は、博多の町のなかに立っている。博多の町は、山笠、どんたくなど、商人の祭が盛んな町として有名である。特に、山笠になると町全体がその熱気に包まれ、また町の生活のサイクルも山笠を中心として巡っているのである。こうした土地の気質を背景にしたF高は、一方では、県下でも有名な進学校である。

F高は、大正6年4月に旧制中学として開校された。昭和23年に「F高等学校」と名前を改めることとなるが、大正期の頃から数えると、創立68年の伝統を誇っている。体育祭は、大正8年から行われているものの、戦争によって中断した時期がある。現在の姿が整ったのは、戦後の昭和23年からの第一回運動会からである。しかし、その基軸というべき運営方法やプログラムの型は、旧制中学時代に築かれたのである。

#### 2. 体育祭 — 学校行事に占める位置

F高校の体育祭は、すべての年中行事の中でクライマックスとなる儀礼である。なぜなら、すべての生徒がコミットできることが、この行事の特徴であり、かつまた、教師の指示に従わされるのではなく自分たちの手で造りあげられる行事であるからである。このような行事は、他には存在しない。

日本の学校の場合儀式が多く、始業式・終業式に加え、学年共通の行事、学年ごとで異なる行事がある。パーネットに従うと、始業式、終業式、卒業式が、通過儀礼にあたり、その他、体育祭などは、強

化儀礼ということになる。この通過儀礼と強化儀礼の区別は、厳密ではなく、一つの目安として扱われている。

F高のこうした行事の中で、三大大行事と言われているものがある。それは、「文化祭」、「体育祭」、「予餞会」である。確かにこれら三つは、生徒にとって息抜きの場になっているが、体育祭が他の二つと違うのは、全員参加の行事であり、一人一人が主役となるからである。また、一年にとってはクラス以外の人間と、特に上級性と交わる数少ない機会の一つである。各ブロックの上級生に怒られながら、体育祭に向けて練習を重ねていく。一方、三年生にとっては最後の仕事であり、この後の行事からは“引退”するのである。一年生は、この体育祭を経ることによって、F高生として一人前になるという。また、三年生はこの後、一気に受験へと向かうのである。つまり、体育祭は、お互いの連帯を高めながら、生徒一人ひとりにとっては、通過儀礼的な役割も果していると考えることができる。

### 3. 体育祭の構造と過程

こうした体育祭は、教師の手で為されるのではなく、生徒が、企画から諸々の装置や道具の製作、場の設営、プログラムの編成に至るまで自分たちの手で行うことが、伝統となっている。この準備は、すでに5月から行われる。具体的にこの運営の中心となるのは、体育委員会である。この生徒会組織は、自由参加を原則としているため、各委員会の人数は不定である。そのため、体育祭前になると、その人数は60人近くに膨れあがる。(三年間を通じての人数は10人程度という)。体育委員長を中心として体育委員だけで話し合いを持つと、そこではグループ組織図が決定さえる(figure 1)。この図式に基づいて、各ブロックのメンバーが決定するのである(figure 2)。いわゆるこれが、学年をタテ割にした集団である。この集団を単位として、体育祭のための、応援合戦用の踊り、応援歌、アトラクション、応援の型の練習をするのである。練習が盛り上がりを見せてくるのは、夏休である。彼等は、学校に出てこれる日は毎日練習をおこなう。9月に入ると、炊出しも行われ、いよいよ学校の雰囲気もピリピリしたものにかわってくる。バックスタンドが設置されると、人文字の練習が始まる。美術部によって画がかれた、バックスクリーンが取付けられるのは、当日の三日前である。

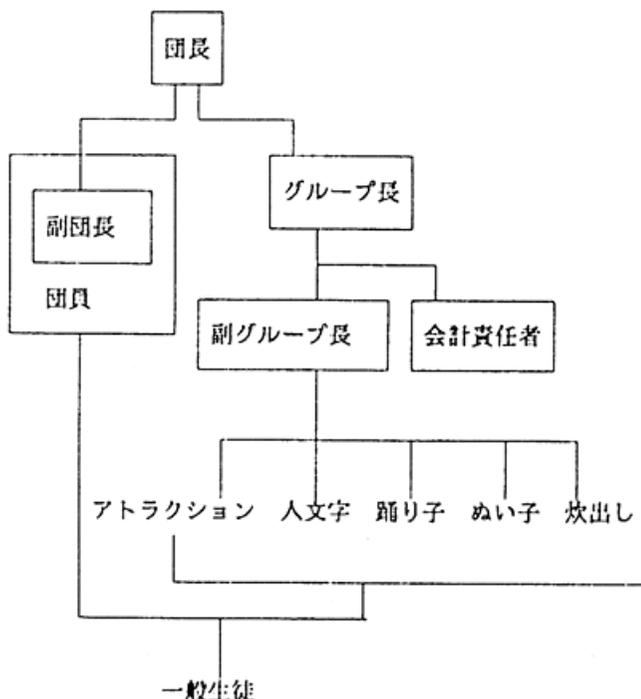


Figure 1 : グループ組織図

グループ	A				B	C	D
テーマ	燦 爛				黄 河	飄 颻	麗 鸞
グループカラー	赤				黄	緑	青
	組	男	女	計			
三年	4	29	15	44			
	10	22	24	46			
二年	3	24	21	45			
	6	45	0	45			
	7	24	21	45			
一年	3	24	21	45			
	5	46	0	46			
合計		21	103	317	369	359	316

Figure 2 : グループ概要

#### 4. 体育祭当日の概要

去年の体育祭のプログラムは、次の様な内容である。

開 会 式

徒 競 走 ( 1 0 0 m , 2 0 0 m )

リ レ ー

F 高 体 操 ( 1 年 )

旗 と り ( 1 年 男 子 )

障 害 走

綱 と り ( 綱 引 を 変 化 さ せ た も の — 1 , 2 年 女 子 )

組 体 操 ( 2 年 男 子 )

— 昼 休 み —

ク ラ ブ 紹 介

恩 師 と し て ( 教 師 参 加 に よ る )

来 賓 参 加

3年遊戯

借物競争

騎馬戦(2, 3年男子)

総合リレー

応援合戦

グループ対抗リレー

学校応援

閉会式

(グループ交歓会)

このプログラムは、生徒の意見により可変的なものであると生徒の間では見なされている。しかし、それにもかかわらず、F高体操、旗とり、綱引、組体操、3年遊戯、騎馬戦といったプログラムと、応援合戦と学校応援の位置は変わらないという。また、プログラムだけでなく、グラウンドの使用方法も変わっていない。生徒の席と、大人たちの席は対面しており、応援合戦の出し物は大人たちに見せるかたちで行われ、その採点は大人の手によってなされる。大人は、最終的に価値の決定権を握っていると言えよう。

前半で盛り上がりを見せるのは、先述したごとく昔から変わっていないプログラムである。例えば、組体操などは、その秩序づけられた美しさに会場からどよめきがおこる(photo 1)。もちろん、これらの競技は兵式体操のなごりである。また、綱引は農耕儀礼である。



photo 1 : 組体操

後半の盛り上がりは、何といても応援合戦、学校応援である。応援合戦は、a) 応援、b) 踊り子、c) アトラクションという構成になっている。各ブロックは、10分間の間に工夫をこらした演技を行う。特に、アトラクションは、古武道、郷土芸能、新しいものという三つに分れるようである。この応援合戦の配点は、他の競技とは比べようがないほど大きい。逆に原点も厳しく、時間を1秒オーバーするごとに、-10点されるのである。生徒は、夏からずっとやってきたことの全てをこの一瞬にかけるのである。このときの点数発表は、さながら、優勝かどうかという時のようである。これとは反対の役割をしているのが、学校応援である。各ブロックの生徒は、4つのブロックで人文字を書く(figure 3)。学校附属の応援団がF校旗を振るなか、生徒は、一糸乱れずF高の応援歌を4曲全て歌いきるのである。彼

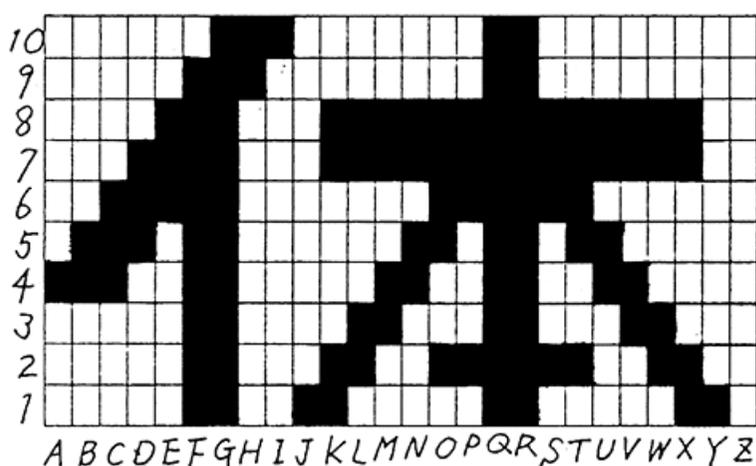


Figure 3 : 人文字

等は、体育祭という日にお互い戦い、しかし今またF高生として、一つにまとまるのである。このときの感動は、忘れられないものであるという。さらに、全ての競技が終わったあと、テントなどもかたづけられたあとに、生徒だけでグループ交歓会がおこなわれる。これは、自分たちには見えなかった他のグループ演技を見たり、団長や役員が感謝の辞を述べたり、女装した男子学生が現われたりして、生徒だけで楽しむのである。生徒にとっての本当の体育祭とは、このグループ交歓会かもしれない。

#### IV 体育祭の意義と役割

##### 1. Youth Culture としての体育祭

F高の体育祭について、さまざまな捉えかたができる。まず、F高における体育祭は、Youth Cultureとしてとらえられる。Youth Cultureとは、生徒文化をさし、体育祭には生徒の心情や役割が反映する。とくにそれは、バックスクリーンの絵や、応援合戦、役割分担に現われる。バックスクリーンの絵は、毎年変り、世情を反映する。また、応援合戦のアトラクションには、古武道、郷土芸能など一貫して演じられてきたものと、ブレイクダンスなどの新しい出し物の両方がある。これらの自己表現の中には、彼等の持つ価値観が提示されている。一方、他の行事に比べ体育祭ほど男女の役割がはっきりすることはない。応援団の男女は、飽くまでも雄々しく、踊り子には、可愛らしさが求められる。また、人の上に立つ仕事は男子がするといった、細々とした役割分担は、暗黙のうちに決定され、「これは男の仕事、これは女の仕事」と明確に分れるのである。三年の遊戯や、グループ交歓会では、男子がかわいらしく振るまったり、女装したりして役割の逆転がおこる。このように、体育祭では日常で潜在化している価値観が、シンボルやメッセージから現われてくるのである。

##### 2. 道徳的社会化機能

一方ではまた、体育祭は、別の機能を果している。

これまで別々だった人間が体育祭を経ることによって、自分以外の特に上級生と接触を持つ機会が与えられる。体育祭に致るまでのプロセスで、暑い中を応援歌の練習をしたり、クラス以外の人間と接触をもつ。上級生からは、「たるんでいる」と言われたこともある。こうした、人と人とのコミュニケーション、特に上級生とのタテのつながりは、F高生たる規範を身につけていくことになる。F高体育祭には、成文化していないいくつかの決りがある。例えば、時間には決して遅れない、自分の役割を正確

に果すというようなことである。これは、集団が何か一つの目標を達成する上では、重要な決りである。プログラムの運営や教室グラウンドの使用時間は限られている。たった一人が居ないために、全員の練習が出来ないこともある。このように仲間集団で、社会化が行われる。

さらに、F高では、定例集会や教師の普段の指導、及び上級生の口から、「F高魂」という言葉が出る。「F高生なら、言われなくてもそんなことは出来るはずだ」と言うのである。体育祭では、より頻繁に言われる。この言葉は、有る種のエリート意識を含んでいるとはいえ、規律を守る、もっと言うところの自律することの重要性を教えているのである。新入生の場合、このように言われながら、F高生としてのアイデンティティーを獲得していくのである。また、在校生は、一つ一つの体育祭を経ることによって責任ある地位に近づくを感じながら、実際、学校の中で権威的な存在となっていくのである。

### 3. 社会的機能

F高三年生は、体育祭が終わると一齐に受験に向かう。その勢いには目をみはるものがある。F高生は、試験の成績は浪人と一緒に発表される。体育祭終了後、二ヶ月たらずでトップの座を現役が占めるようになるのである。このことは、一つにF高生としてのプライドや、アイデンティティーと関係していると考えることができる。

生徒は、日常の学校生活の指導で、F高生に相応しい行動をするようまた、精神的な喚起をうながされている。そこに、体育祭などのイベントでさらに刺激を与えられる。もともと中学校ではトップの成績だった生徒たちである。自分のエリートとしてのプライドに訴えかけられながら、エリートであることを意識せざるを得なくなる。一方では、そうでない人間は、相手にされない学校環境を作り出す。この学校環境は、社会の一端であり、現実のきびしさを生徒に教える。

生徒は、儀式などを経るうちにF高生となり、エリート意識を高めていく。もし、何かの苦しみに合ったとしても、F高生としてのプライドとアイデンティティー、自信があるならば、それを乗り越えていくであろう。つまり、人生を乗り越えていく礎となるのである。そして、受験や、就職でその成果をあげていけば、青年期という精神の形成に重要な期間に育まれた、エリートが優先権を持つ価値観を、社会的に認められた形で維持していくことになるのである。

### 4. 逸脱者の役割

こうしたエリート意識に耐えられない者、成績が芳しくないもの、セクト的な考えに同意できない者は、逸脱者として現われてくるようになる。また、古い伝統を持ち、県下でも有数の進学校における地域の人々を招いての行事では、明確な価値観が表出し、生徒がそれに従うことが強要される。日本では、成績と行いの良さは相伴うものであり、そうあるべきであると考えられている。それゆえ、体育祭では、集団いかに統率が取れているかが求められ、生徒には心身共に集団に尽すことが求められる。教師だけではなく、体育祭の期間は生徒がイニシャチブを取るのも、生徒同士でこの傾向を強化していくことになる。この期間は、時間や練習をすすめるために規範や秩序に敏感になっているため、ややもすれば同級生同士でのしぎをけずることになる。集団の原理が働き、練習をさぼったりすれば「白い目で見られる」のである。

これらの理由により、体育祭参加しない、したくない者も出てき、露骨に参加を拒否する者、グループに入らなくてもいいように何かの役についたりする者がいるのである。特に、前者の立場を取るものは数%であるが、教師から「役にたたないもの」と思われている。しかし、彼等の存在は学校の体制に

従う者と共に現われ、現在の学校の在り方やその価値体系に疑問を投げ掛けるものである。つまり、価値は決して一元的ではなく、絶えず現状を問いただそうとしているのである。また、彼等の存在自体は、人々の間に緊張関係を作り、現在の価値観を意識化し、さらには創造の可能性を与えるのである。

## V 体育祭の社会化機能

儀礼には、儀礼に顕著な特徴や機能がある。体育祭が、儀礼であるのかどうか又、儀礼論を基にした分析が可能かどうか、ムーアとマイヤーホフの五つの特徴に戻って検討したい。

1) 明確な目的がある — これには、問題がなかろう。教育目的は、心身共に健康を育むことであり、お互いの親睦を深めるということである。

2) 明確なシンボルとメッセージがある — これについて、彼等は次のような説明を付け加えている。「選んだ目的を活性化し顕在化する儀礼は、思考や思惟といったより大きな文化の枠組みと必然的に関係している」、そのために思想 (ideology) が、視覚化する時がある<sup>30)</sup>。体育祭では、こういったことは幾つかの場面でみられる。例えば、組体操における肉体の鍛練度を表す表現方法は、自分以外の人間との力と精神の協調という形をとる。これは、日本の社会の中では必要とされる行動の原理であることを示している。

3) 潜在的な主張がある — 2) で記したような、明確に現われたことを辿っていくだけではなく、役割分担や相互関係などにも、このことは示される。例えば、先述したように明確な男女の役割の分化が、暗黙のうちに為されるということである。このことは、公に取沙汰されるのとは別に、若者の心の中には、役割の分化が認識されていることを示している。

4) 社会相互関係への影響がある — これは先述したように、体育祭を経ることでF高生らしくなっていくことと、一斉に受験へ向かって集中していくことなどが上げられる。

5) 文化対カオス — 体育祭を行うことによって、日頃あまり強調されない価値観がグロースアップする。今日のように、社会が複雑化し専門化すると人々は他人のことより自分のことに懸命になりがちである。だが、儀礼を行うことによって「和」の重要性を再認識する。その現われが、学校応援であり、F高の一員であることを再認識するのである。学校が、一つにまとまるのである。

以上のことにより、体育祭を儀礼として見、その機能を問いただすことができよう。前述した機能は、カオスからコスモスへ向けるという機能と、情緒的な連帯感を高めるという機能である。これは、ムーアとマイヤーホフの言う4)と5)における説明に同じである。体育祭は、高校生活に一つの節目を作り、バラバラだった生徒はF高生として一つに統合される。個人的には、価値や所属集団を確認し、集団のレベルでは、次の出来事へ向かうべく調子を整える機能を果しているのである。

それでは、このような機能を果す儀礼としての体育祭は、生徒達の社会化にと結びついたとき、どのような役割を果しているのか。儀礼を検討する場合、プロセスとして捉えることが重要であり、体育祭もその例にもれない。体育祭の当日の儀礼の機能を高めるのは、練習から続くプロセスがあったからであり、また体育祭が終了してもなお、生徒の後の人生の中でその意味を判断する事が重要であろう。

夏休みから本格化する練習は、学年をタテ割りにしたブロックが形成され、苦楽を共にすることにある。その場合、集団としてのまとまりを保ったり、F高生として恥ずかしくない行動をするための規範や価値を教えこむのは、上級生である。また、集団の中でどのように行動すべきかということは、生徒同士の相

互関係によって経験的に学ばれる。ここで学ばれた行動の仕方は、他の集団や個人に出会ったときどう行動すべきかという行動の基盤を形成する。このことはつまり、別の人間関係にもスムーズに適応することができることを意味している。この様に仲間集団が主として社会化の担い手になるものの、最終的には、大人が価値の決定をするのである。例えば、応援合戦の点数は大人たちによって付けられるものであり、生徒は大人から高得点を得るために出し物を工夫する。

一方、こうした練習による他校でも共通と考えられる社会化機能とは別に、この体育祭では古い伝統を持つ進学校ならではの価値観が表出する。地域住民の目にふれる体育祭では、より秩序だった統率のとれたF高生を見せる必要がある。体育祭が近づくと、教師はいつもより「F高生らしさ」を喚起するようながし、またブロック長を始めとして生徒に「F高魂」という言葉が口にされるようになる。時間を守るなど集団で行動する際に必要とされる規律は、愛校心、忠誠という言葉とともに発せられ、規律を守らない守れない者はF高生ではなく、F高生ならばそれができるはずだと言うのである。彼等生徒に求められている自律の精神は、エリート意識と一体となっている。すなわち、彼等の言う自律とはF高生として行動することであり、F高に忠誠を誓い、それに似合う行動をすることであり、その他の価値観は強く排斥する。F高への忠誠とは、明治から日本の学校に受けつがれてきた、立身出世主義と官僚主義の受け入れを意味することになる。F高に入り、F高の体制に従い、成績を上げていくことは、一流の大学に入り地域の未来を荷なうことなのである。事実、地域の社会的に重要なポストは、これら一流の高校出身者の派閥が強い。

こうした、F高への愛校心あるいは帰属意識は、体育祭に致るプロセスの中で絶えず培われつつ、当日の学校応援で最大になる。彼等は情動に訴えるやりかたで、F高としてのアイデンティティーを心に刻みつけられる。同時に、自律の精神及びエリートとしてのほこり、ひいてはエリートが優先権を持つという価値体系なども一緒に刻みつけられることになる。自律とプライドとは、彼のその後の人生において様々な障害を乗り越える契機となるのである。そして、一流の大学に入り、一流の会社に就職したり重要なポストについたりしていき、青年期という精神形成にとって重要な期間に身につけた価値を社会に持ちこしていくのである。このことは、現在の派閥を維持存続させていくことにつながる。

このように、体育祭という儀礼を社会化という側面からとらえた場合、日本特有の教育機能を果し、日本独特の文化の維持につながっている。生徒は、体育祭の練習をおこなうプロセスにおいて、日本の社会で生きていくために必要とされる人間相互の関係を学ぶとともに、その関係を支える価値体系（集団主義など）を学ぶことになる。一方、こうしたエリート校での体育祭は、学校への愛校心と自律の精神が結びついたとき、エリートが優先権を持つ社会体制を維持する機能を果すのである。

## VI 結 び

以上、体育祭を中心に学校儀礼の社会化機能を調べたが、他の諸儀礼との関連や、また中学・小学校段階におけるそれらの問題についての研究は今後に残された課題であり、この研究はそのためのささやかな一試論であった。

【注】

- 1) 田 中 一 生  
1976 「高等学校の組織構造と生徒の Involvementに関する調査研究」、『九州教育学会研究紀要』  
第4巻 九州教育学会、pp.153-183
- 2) King, Ronald  
1973 School Organization and Pupil Involvement, London:Routledge & Kegan Paul.
- 3) Bernstein, Basil  
1975 Class, Codes and Control vol.3, London:Routledge & Kegan Paul.
- 4) Burnett, Jacquetta Hill  
1976 " Ceremony, Rites, and Economy in the Student System of an American High School ", in Nicole Benevento (ed.), Educational Patterns and Cultural Configurations, New York:David M. Kay Company, pp.313-323.
- 5) 山 村 賢 明  
1973 「家族集団と社会化」、『教育社会学の基本問題』、東洋館出版社、pp.92-111.
- 6) Ibid., p.100.
- 7) 萩 原 元 昭  
1972 「学校の社会化機能」、『教育社会学研究 第27集』、東洋館出版社、pp.40-44.
- 8) Ibid., pp.40-41.
- 9) Ibid., p.42
- 10) 池 田 秀 男  
1982 「社会化の視点からみた教育」、『教育社会学』、有信堂高文社、pp.42-59.
- 11) 松 原 治 郎  
1972 「社会化の諸相」、『教育社会学の展開』、東洋館出版社、pp.5-8.
- 12) Ibid., p.9.
- 13) 江 淵 一 公  
1985 「文化化と教育」、綾部恒雄編、『新編・人間の一生』、アカデミア出版者、pp.40-41.
- 14) ボック・フィリップ  
1977 『現代文化人類学入門』、江淵一公訳、講談社
- 15) Herskovits, M. F.  
1965 Cultural Anthropology, New York:Alfred A. Knopf, p.327.
- 16) 江淵, Ibid., p.41.
- 17) 江 淵 一 公  
1983 「教育人類学」、祖父江孝男編、『現代の文化人類学』、至文堂、p.172.
- 18) Ibid., p.172.
- 19) Ibid., p.173.

- 20) Reimer E. H.  
1971 " Alternatives in Education " , in Adams, D (ed.), Types of Schooling for Developing Nations, London:Routledge & Kegan Paul, p.86.
- 21) 江淵, 1985, Ibid., p.56.
- 22) Ibid., p.56.
- 23) マートン, R. K.  
1969 『社会理論と機能分析』、青木書店, p.102.
- 24) Ibid., p.102.
- 25) 青木 保  
1984 『儀礼の象徴性』(岩波現代選書)岩波書店、p.43.
- 26) Ibid., pp.43-44.
- 27) Moore, Sally F. and Myerhoff, Barbara G. (eds.)  
1977 " Introduction " in Secular Ritual, Assen/Amsterdam, the Netherlands:Van Gorcum, pp.16-17.
- 28) 大林 太良  
1972 「儀礼」、大林太良編、『儀礼』、至文堂, p.12.
- 29) 山田 隆治  
1972 「儀礼」、大林太良編、『儀礼』、至文堂, p.20.
- 30) Moore, Sally F. and Myerhoff, Barbara G. ( eds. ), 1977, Ibid., pp. 16-17.